

「資本論を読む会」便り

2025.7.19 No. 100 (訂正版)

6月は、次の箇所を読みました。

第Ⅰ部：第1篇 第1章 第3節 Aの三 等価形態 (続き)

第Ⅱ部：第3篇 第12章 第5節 マニュファクチュアの資本主義的性格

※ 編集人の復習ノートです。レジュメや参考書、議論を基に、読んだ箇所の要点や調べた結果をまとめました。

段落は、大月書店の全集版の本文の字下げと傍注の付け方で区切っていますが、原則通りでない場合もあります。段落番号の後の小さい字は、(原著ページ番号)と段落の出だしなどです。

第101回

第Ⅰ部 第1篇 第1章 第3節 価値形態または交換価値

A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態

X量の商品A=Y量の商品B または X量の商品AはY量の商品Bに値する。
(20エレのリンネル=1着の上着 または 20エレのリンネルは1着の上着に値する。)

三 等価形態

第1段落に「一商品の等価形態は、その商品の他の商品との直接的交換可能性の形態である。」とあります。この「直接的交換可能性」の意味が分かりづらく、議論を重ねてきました。レポーターによる前回のまとめの後、少しだけ議論しました。「まだスッキリしないところがある」方もおられますが、理解は深まった、ということで次に進むことになりました。

第2段落 (70)「ある一つの商品種類、たとえば上着が、別の一商品種類、…」 ～

上着の価値量は、上着の価値形態によって規定されるものではない。

- 上着が、リンネルのために等価物として役だち、リンネルと直接に交換されうる形態にあるという属性を受け取っても、それによつては、上着とリンネルとが交換されうる割合は与えられてはいない。
- この割合は、リンネルの価値量が与えられているのだから、上着の価値量によって定まる。
- 上着が等価物として表現され、リンネルが相対的価値として表現されよう、リンネルが等価物として表現され、上着が相対的価値として表現されよう、上着の価値形態とはかわりなく、上着の価値量はその生産に必要な労働時間によって規定されている。
- 上着が価値表現において等価物の位置を占める場合、この上着の価値量は価値量としての表現を与えられてはおらず、ただ或る物の一定量として現われているだけである。

最後の「或る物の一定量」とは、ある分量の使用価値、ということでしょう。

第3段落 (70)「たとえば、40エレのリンネルは「値する」——なにに？ …」 ～

一商品の等価形態は量的な価値規定を含んでいない。

- 例 40エレのリンネルは2着の上着に値する、 という関係において、
 - ・上着は等価物。使用価値上着がリンネルに対して価値体として認められている。
 - ・2着の上着は、40エレのリンネルの価値量を表現している。
 - ・上着は、上着の価値量を表現することはできない。
- 価値等式における等価物は、使用価値の単純な量の形態をもっているだけであり、自分自身の価値量を規定していない。
- このことが、ベーリらをして、価値表現の中に単なる量的な関係を見る誤りに陥らせた。

簡単に言ってしまうと、

等価形態にある上着は、リンネルの価値を表わしてはいるが、自分自身の価値量を表わしてはいない。

となるでしょうか。

「価値体」という語が新しく出てきました。リンネルの「価値を表わす使用価値」と考えたら良いのではないかと思います。

ベーリらの誤りとは何かという質問がありました。これに対して、ベーリは、2商品の価値等式に価値表現が含まれていることに気づかず、これら商品の使用価値の量的関係しか見ることができなかった、という説明があったと思います。価値の認識には至らなかったようです。

なお、マルクスの「剰余価値学説史」第3分冊 p160に、ベーリの主張とそれに対するマルクスの論評があります。

第4段落 (70)「等価形態の考察にさいして目につく第一の特色は、…」 ～

等価形態の第一の特色

- 使用価値がその反対物の、価値の、現象形態になることである。

この段落から第8段落で第1の特色を説明しています。第2の特色は第9段落以降で説明されます。

「20エレのリンネルは1着の上着に値する。」という関係において、等価形態にある使用価値(=1着の上着)は、リンネルの価値が上着という形になって現われたものだ、これが「第一の特色だ」ということでしょう。

議論の中で、「価値は商品の本質で目に見えないが、……上着という形になって現われた。」と言うときの「本質」という語の意味がよく分からない、という指摘がありました。「本質」の意味について、広辞苑には次のような説明があります。

- ①あるものをそのものとして成り立たせているそれ独自の性質。例えば、動物を動物たらしめている性質。本性。
- ②変化常ない現象的存在に対し、その背後または内奥に潜む恒常的なもの。この意味での本質は実体として形而上学的な存在と解される場合が多い。⇔現象。
- ③実存に対する語…。(以下略)。
- ④フッサールの現象学の用語。(以下略)

通常①の意味で使われますが、「現象」という語との対比で使われる場合は、②の意味が加わることになります(「形而上学的な…」についてはよく分かりませんが)。

例えば、どんな物体にも重さ(質量)がありますが、物体の運動に関わる量で「本質」と言えます。ですが目には見えません。今、この物体を押してみるとなかなか動かなかったとします。これが「現象」です。なお、この結果からこの物体はとても重いことが分かります。

※ ここまで復習してきたところで、前号で「等価物…の『等価』は、…『価値に等しい』という意味」ではないかと思いたのは間違ってたかなと思いました。「等価」は普通に「等しい」という意味だと考えて良さそうです。「上着はリンネルの等価物である」は、「上着はリンネルと価値が等しい物」と読むのが素直かなと考えています。

第Ⅱ部 第3篇 第12章 分業とマニファクチュア

第5節 マニファクチュアの資本主義的性格

第8段落 (385)「分業にもとづく協業、すなわちマニファクチュアは、…」 ～ (注75まで)

マニファクチュアは、堅固さ・幅広さを増すと、資本主義的生産様式の意識的・計画的・組織的な形態になってくる。

●分業にもとづく協業(＝マニファクチュア)は、その存在がいづらか堅固さと幅広さを増してくれば、資本主義的生産様式の意識的・計画的・組織的な形態になってくる。

マニファクチュアに特有な分業は、やがて、同職組合的手工業と同じように、ひとたび見いだされた形態を数百年も伝統的に固守する。

この形態が変わるのは、いつでも労働用具の革命の結果である。

●見いだされた分業の形態を固守する例として、衣服マニファクチュアや製本を取り上げることができる。

全集版本文の「数百年も」について、マニファクチュア時代そのものが「16世紀の半ばから18世紀の最後の3分の1期まで」なので、レジュメはフランス語版にならって「百年以上」としています。これについて、「辞書に『数』とは『2から9』とあるので220年を数百年と表現することに問題はない」という指摘がありました。(ここの記述を訂正しました。)

分業の形態を固守するマニファクチュアの例として衣服と製本が取り上げられていますが、これは異種のマニファクチュアと有機的マニファクチュアとを区別しているのだろうか、という意見が出されました。しかしあまりはっきりしたことは分かりません。

「近代的」マニファクチュアという表現は初めて出てきたと思います。「その存在がいづらか堅固さと幅広さを増し」たマニファクチュア、ということでしょうか。

第9段落 (386)「マニファクチュア的分業は、手工業的活動の分解、…」 ～

マニファクチュアは、一方では歴史的進歩および社会の経済的形成過程における必然的發展契機として現われ、他方では文明化され洗練された搾取の一方法として現われた。

●マニファクチュア的分業は、一方では、歴史的進歩および社会の経済的形成過程における必然的發展契機として現われた。

- (a) 一定の社会的労働の組織をつくりだした。
- (b) 同時に労働の新たな社会的生産力を発展させた。
- マニファクチュア的分業は、他方では、資本主義的な形態でしか発展しえなかった。文明化され洗練された搾取の一方法として現われた。
 - (a) 相対的剰余価値を生みだすための、または資本の自己増殖を、労働者の犠牲において高めるための、一つの特異な方法でしかなかった。
 - (b) 労働の社会的生産力を、労働者のためにではなく資本家のために、しかも各個の労働者を不具にすることによって、発展させた。
 - (c) 資本が労働を支配するための新たな条件を生み出した。

分業とか労働用具がどういう経緯で剰余価値を生み出すようになったのか、農業や漁業での剰余価値はどのように生み出されるのか、という質問がありました。

レポーターから、資本主義的生産やマニファクチュアの始まりに関して、第11章やこの第12章の第1節で述べられていることにも触れ、簡単な説明がありました。

農業については、18世紀後半からの農業革命(第2次)によって農業の資本主義化が進んだ、ノーフォークの改良農業が有名、という発言もありました。イギリスでの話です。

その他、商品生産の発達、工業化、など、いろいろな説明や発言がありましたが、ノート不十分でうまく再現できません。済みません。

第10段落 (386)「マニファクチュア時代にはじめて独自の科学…」 ～ (注83まで)

独自の科学として現われた経済学は、社会的分業一般を、同量の労働でより多くの商品を生産する手段として考察した。

- マニファクチュア時代にはじめて独自の科学として現われた経済学は、量と交換価値とを強調した。

すなわち、社会的分業一般を、マニファクチュア的分業の立場から、同量の労働でより多くの商品を生産する(＝商品を安くし資本の蓄積を速くする)ための手段として、考察した。

- 古典的古代の著述家たちは、質と使用価値だけにしがみついていた。

すなわち、交換価値とか、商品を安くすることなどとは、何も考えられていなかった。(例として、プラトン、クセノフォン、イソクラテスらが取り上げられている。)

前段落に「マニファクチュア的分業は、…、資本主義的な形態でしか発展しえなかった。」とありました。生産の目的は剰余価値の取得ですから、この時代に現われた経済学が「量と交換価値とを強調した」のは当然の成り行きということでしょう。

古典的古代は奴隷制に基礎を置く社会で、身分制度が支配的分業だったという指摘がありました。地中海貿易の発展があったとは言え、商品生産が十分発達して生産の目的が剰余価値の取得になるレベルには至っていなかった、ということだと思われます。